

美しき夕べの歌

高崎 淳子

わたつみの豊旗雲に入り日射し今夜の月夜さ

やけかりこそ 天智天皇『万葉集』

落日に染まる海原が見えます。五彩にかがやく雲が棚引き、きつと今夜の月は清々しく出ることだろう、出てほしいと祈るような思いを感じさせます。斉明七年百濟救援のために西に向かった軍中大兄皇子はあり、大和三山の長歌に続く反歌二首のうち一首です。長歌との付き具合から諸説あり、額田王の代作ともいわれ、熟田津の歌に近い作といえるのでしょう。成立事情はさておき、雄渾な情景を創出しています。

春の花秋の月にも残りける心の果ては雪の夕

暮 藤原良経『秋篠月清集』

〈わたつみ〉の歌からどれほどの時間がたったのでしょうか。『新古今和歌集』の三夕の歌や定家の〈佐野のわたり〉も素晴らしいとは思いますが、良経の総括はなぜか寂しいものを感じさせます。

近代に入って、与謝野晶子の〈金色の〉や北原白秋の〈春の鳥〉は誰もが思い出す美しき夕べかもしれません。中原中也の「春の日の夕暮」は美しいかどうかはそれぞれですが、思い浮かぶ夕暮のひとつです。「夕照」を強く心にとめたのは、帰郷してからです。あ

るご婦人からいただいた絵はがき（中也記念館製）が美しかったからです。解説書によりますと、大岡昇平氏は戦地の熱帯の夕焼けを眺めながら歌っていたということです。〈落陽は、慈愛の色の金のいろ〉がぐっと身に染む年になりました。

青空がしだいに薄くなり、黄から朱をかけていくように染まっていきます。季節によっては紅が濃くなり紫までいくかもしれません。極楽浄土の彩を感じさせるときもあれば、毒を思わせることもあり、夕陽は黄金の輝きを見せ水平線に没していきます。横浜に長く在住しましたので、時折散策する鎌倉の海から江の島方向へ、富士山の方へ沈む夕陽のゴールデンアワーには黄金の菊が咲いて散る一瞬の絶景をみることもありました。

折々に夕陽（日）夕暮れを詠ってききましたが、とくに最高の輝きと言えは、かつてギリシャのアテネやクレタ島に旅したときにスニオン岬に独り立ち、「オレンジダイヤモンド」と名付けた夕日です。総合誌「歌壇」二〇〇一年六月号に発表し、第五歌集『風の迷宮』（二〇〇一年刊）に収めました。亡き父への挽歌です。

父を呼ぶスニオン岬 しろがねの波がこがね
にオレンジダイヤモンド

また、第六歌集『麗光亭日乗』（二〇〇六年刊）に収めました「美夕の賦」（初出は「歌壇」二〇〇五年八月号）は、私がこの当時体験した美しき夕べの情景をピックアップして十二首の短歌で一編としたものです。

美夕の賦

浅紫纏ふさつきの水の香に思ふひとすぢゴッホ展青し

リュベロンの金の夕雲ロゼの谷かの冬はひた旅人なりき

たまきはる屈原「懐沙」つぶやきぬ趣味と暮れて散るニセアカシアは

愁殺の秋瑾烈士しのお夜半いざなひやまぬ西湖夕照

夕波のきららビーチよ周防灘友ら還らぬ故里がある

七回忌父と来し道 連れ立ちて雄太八歳せつなさ知れど

人を負ふことなき背なをあたためて美夕の浜ゆ空ほしいまま

須弥山はときじくに花白からむわれには初夏の藍の夕富士

夏されば空の高楼モスラ飛ベゴジラ帰巢す豊葦原へ

朝顔の蔓待つ空に墨流し思ひとどめむ楮紙六尺に

水のやうにトルコ桔梗咲くからにシャンパングラスに夕陽を注ぐ

芸亭や横浜ローズひかりたる港の丘にわが真

珠月

一首目は二〇〇五年に東京国立近代美術館で開催された「ゴッホ展―孤高の画家の原風景」を五月に見に行った折りのものです。おびただしい数の作品や資料解説がありました。人それぞれにある原風景に思いを馳せながら結句（青し）は、青のもつさまざまな印象を象徴的に表現しています。五月は菖蒲燕子花花菖蒲の青紫、藤の薄紫と紫系の花々が競演します。浅紫の袖を着て行きました。

二首目は、フランスです。二〇〇三―〇四年末年始の旅行詠は同歌集で「仏蘭西紀行」として収めました。その折のリュベロンの夕雲を取り出して回想的に詠っています。プロヴァンスのリュベロン地方の小々な村、ゴルドとルシオンを巡り、輝く濃いオレンジの夕雲とロゼワインに染まった谷を目に焼き付けました。フランシス一世のヴァルド派虐殺事件のメモも残っています。《かの冬》はひたすら旅をしていたと日常にある今をやや嘆き、旅へのそぞろ心を抱いています。

三首目は、三峡クルーズの折のものです。二〇〇二―〇三年末年始の旅行詠は同歌集で「冬の水位」として収めました。中国が万里の長城以来の国家プロジェクトとして取り組んでいた長江を堰き止める三峡ダムを見学した折、赤い夕陽がほんやりと風景を灯していました。屈原故里も近く、水没する村の茅坪移民など多くのことを考えさせられました。「懐沙」は屈原が汨羅に投身する前の遺書のような詩です。ニセアカシアがはらはらと散っていました。

四首目は、二〇〇四年仲秋の頃訪れた杭州の夕照です。同歌集で「西湖夕照」として収めました。夕照が誘う夜半の思いを詠っています。秋瑾さんの激しい生き方に共感というより感動があります。魯迅の「薬」には耐えがたいものを覚えますが、西湖畔の墓や、関連資料を読むにつれ、美貌の女傑にひれ伏したい思いがするのです。

五・六・七首目は、二〇〇五年五月に亡父の七回忌に帰省した折のものです。山陽小野田市に焼野海岸があります。竜王山の麓で、近年有名なレストランができ、近辺は整備され、〈きららビーチ〉と呼ばれるようになりました。ここは「日本の夕陽百選」に選ばれるほど夕陽が美しいのです。遠く関門海峡や九州の山並みまで見晴らせます。このあたりは周防灘という瀬戸内海の一部です。子ども時代より美しく蘇った夕波のビーチで還つてこない友人たちのことを思っています。人生の途上、異郷で過ごす人は多いでしょう。永遠に還らない人たちも多い、そんな故里なのです。

幼い頃父に連れられて歩いた散歩道を、甥の雄太を連れて散歩しています。八歳の雄太は人の死や別れが解り、せつなさを感情として分岐させてはいますけれど、まだまだ幼くはかない絆です。

子供を産んで育てることを経験していませんので、自分の背に人を背負ったことがあります。その背を故里の夕陽で温めて大空を自由自在に飛ぶごとく生きたいと詠っています。

八首目は、山口宇部空港から関東へ帰る空路の短歌です。往きで見えるか、復路で見えるか、富士がくつきり見えるかたいへん楽しいのです。占いのようにも感じるがあります。法事からの帰路ですから、かの世へ行つた亡父への思いが浮上します。富士山とときじくの雪があるように、須弥山にはときじくの白い花が咲いてい

るのではないか。機窓には初夏の藍色をした夕富士がゆつたりと見えています。

九首目は、機窓から見える雲の情景です。夏ですので積乱雲が高楼のように立っています。モスラやキングギドラが飛ぶ空を想像しています。彼らが現れば、われらのゴジラ（私は水爆ゴジラと同年生です）もきつと古巣の列島に帰つてくることでしょう。葦が豊かに生えている原野に。

十首目は、夕暮れから夜へむかう短歌です。二尺×六尺の料紙は展覧会サイズの種類です。初夏の頃から取り組みますので、歳時記的になっています。楮紙は比較的薄いシャリつとした手触りの紙です。朝顔が蔓を伸ばしてくるのを待っている空に墨を美しく流し、思いを料紙の上にとどめたいのです。この年は朝顔三題（秋はてて露の籬にむすほほれあるかなきか）うつつるあさがほ「源氏物語」・おぼつかなそれかあらぬかあけぐれのそらおほれる朝顔の花「紫式部集」・朝がほや一輪深き淵のいろ与謝蕪村）を書きました。大正時代の国語学演習でしたか、関一雄先生の講座で、影印本の「源氏物語」をテキストに使用しました。「変体仮名字類」片手に読めない字を辿ることからの学習でした。その頃からでしょうか、流麗な小筆の文字を書いてみたいと思うこともありましたが、なかなか仮名書道にむかう時間がありませんでした。「四十の手習い」という頃、少し本気で古筆を学び始めました。その発展として展覧会に出品するくらいにはこの頃なつていたのです。その後いくつかの古筆を学び、「和泉式部統集切 伝藤原行成筆」を臨書するときは、ほぼそ大切にしてきたものをかみしめています。

十一首目は、水無月十日生まれの私の誕生花の短歌です。第一歌

集『寒昴』には〈飲み下すワインも嘘も愛のうち トルコ桔梗と都合で呼んで〉があります。その当時よりトルコ桔梗は改良が進んで、色々な色や八重咲きも出ていますので、誕生日ごとに選ぶのを楽しみにしています。白や紫が柔らかく風に戦ぐ水の風情を美しいと思うのです。誕生日のシャンパングラスに夕陽も注いで飲むのです。

十二首目は、横浜の薔薇の夕暮れです。港の丘に続くエリアにあります神奈川近代文学館に芸亭（うんてい・最古の図書館の名前）の桜があります。薔薇は横浜の市花で、港の丘には薔薇園があります。その中の「横浜ローズ」の美しさをひかりで表現しています。水無月は真珠月でもあります。いつまでも美しい誕生月の夕光を見られるように祈る「美夕の賦」一編の締めです。

空色の自転車で走る有帆船瀬戸の夕陽に小野

田橋映ゆ

帰郷後刊行しました第八歌集『難波津』（二〇一六年刊）の一首です。定年退職後の解放感の中で穏やかな夕陽を詠っています。

私は馬場あき子先生に師事して歌誌「かりん」（結社「歌林の会」）に所属しています。副主宰の岩田正先生にも、初期からご指導を頂きました。岩田先生は二〇一七年十一月三日に九十三歳で逝去されました。

秋は帰路雲の茜を身に浴びてつれだち歩む去

りし友らと

岩田正『柿生坂』

亡くなられた直後に出版されました『文藝春秋』二〇一七年十二月号が初出で、絶筆の一編中の短歌です。遺歌集『柿生坂』に収められました。〈秋は帰路〉という初句の強い詠い出だしは『枕草子』序段を想わせ、「いとをかし」と続けたくなります。秋の帰り路に

茜に染まった雲から光が降り注ぐように感じられたのです。夕光や夕日ではなく〈雲の茜〉が空を充たしています。彼岸が見えたのかもしれません。予感めいて悲しいけれども温かみのある夕雲をイメージさせます。この世から去っていった友たちへの思いが影のように連れ添っています。長い人生の果てに夕雲は素晴らしい茜色を見せたのです。忘れられない夕べの歌です。

*

二〇一五年四月山陽小野田市に帰郷いたしました。一六年の国語国文学会、一七年の鴻文会に出席いたしました。横浜在住中、『山口国文』に数編「中国旅行詠の世界」を中心に掲載していただきました。久しぶりに「トークルーム」で私と私の短歌についてお話しをさせていただきました。

（たかさき・あつこ）